

奥羽大学歯学部第2学年における 解剖学小テストに関する学生の評価

佐藤 知哉 芹川 雅光 宇佐美晶信

Evaluation of Mini-Test of Anatomy by Second Grade Students of
Ohu University School of Dentistry

Tomoya SATO, Masamitsu SERIKAWA and Akinobu USAMI

As an evaluation of lectures given at the Department of Oral Anatomy, Ohu University in 2017, we conducted a survey on second year students about their learning habits and their reception to short examinations given in each lecture.

The short examination was a five-minute computer based test composed of five questions regarding the materials of the last lecture. In the survey, we asked about each student's usual amount of study time per day and their ideas about the short examination. The aim and methods of the survey were explained during the lecture. Approximately 20% of the students answered that they studied for 30 minutes a day as a regular learning habit. In addition, the short examination received favorable response from more than 90% students. These results suggest that regular short examinations about lecture materials may improve the learning habits of second year students, who are at the beginning of their specialized studies.

Key words : learning habits, mini-test, survey

緒 言

奥羽大学のカリキュラムにおいて、教養科目の学習を終えたばかりの第2学年の歯科医学に対するモチベーションや学習習慣には学生間でのばらつきが存在すると考えられる¹⁾。平成29年度口腔解剖学分野の講義において成績評価の一部として毎回の講義直前に前回講義内容について小テストを実施した。今回この小テストが学生の学習習慣に与えた影響を調査するとともに、学生の「小テスト」に対する評価をアンケートによって行った。

アンケートの実施方法

口腔解剖学と解剖学の講義において、5分間で

5問のCBT形式の小テストを行い、成績が80%未満の場合は再試験の対象とし、一度だけ再試験を行った。その際の成績は上限を80%とした。なお、小テストの評価は科目の成績評価の20%とした。

奥羽大学第2学年の学生全員に対して、通常の1日の学習時間と前期定期試験の成績分布について質問するとともに、毎週行われることになる小テストに対する学生からの評価をアンケート形式で集計した。アンケートはメールでの提出により行った。時期としては口腔解剖学分野の最終講義終了時で、後期定期試験より前に実施した。なお、アンケート前には講義時間内にアンケートの目的や方法について説明を行なった。対象は奥羽大学

歯学部第2学年56名で、52名から回答が得られた（回収率92.9%）。なお、本研究は奥羽大学倫理審査委員会の承認を受けて行った（承認番号：206号）。

結 果

通常の学習習慣としては1日の学習時間が30分未満の者が約20%存在していた（図1）。口腔解剖学および解剖学の小テスト一回のための学習時間はいずれも約75%の学生が1時間以内であった（図2, 3）。口腔解剖学および解剖学の前期定期試験の成績の平均はそれぞれ81.5点, 83.8点であった（図4, 5）。学習時間の増加を強いられる小テストに対する学生の評価は「普通」「良い」「かなり良い」の評価が90%以上を占めていた（図6）。学生の学習時間は増加しているものと考えられた（図2, 3）。アンケートにより、口腔解剖学、解剖学それぞれの小テスト一回のための勉強時間と口腔解剖学、解剖学の前期定期試験の成績の対応を見たところ、それぞれの相関係数は0.042, 0.0026であり、成績上位の学生の勉強時間は様々であるが、短時間の学習で効率的に学習している学生も多く見られた（図7, 8）。

考 察

今回のアンケートの結果からは、小テストの実施による学習時間の大きな増加は見られないが、多少なりとも講義毎に学習する機会ができ、少ない時間で継続的に学習を行っていると考えられた。自由記載欄には他科目との関連で、1週間の小テスト数について不満はみられたが、復習の習慣が出来たなど概ね小テストに対する学生からの評価は良好であると考えられた（表1）。通常の学習習慣としては1日の学習時間が30分未満の者が約20%存在していた（図1）。これは入学前の学習習慣のみならず、入学後の教養系科目が多くを占める第1学年時に学習時間が減少している者も含まれると考えられる。小テストにより日常的に評価が行われることで専門科目が始まる第2学年の一部において、学習習慣の改善が行われていると考えられた。黒田らの調査によると、担任の所見で成績不振につながる勉強意欲の欠如理由とし

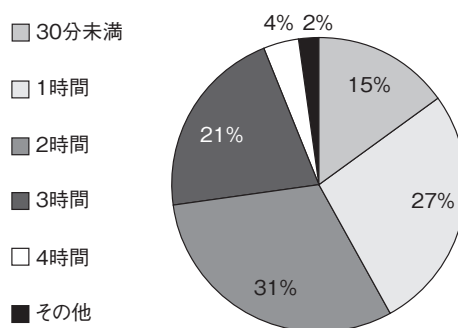


図1 通常の学習時間について

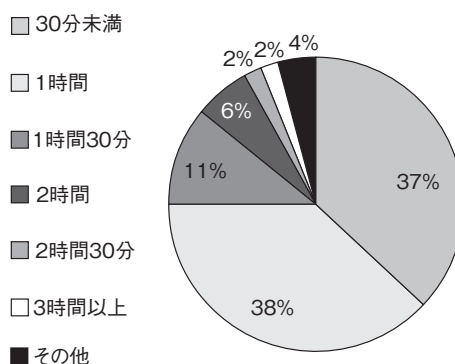


図2 口腔解剖学小テスト一回のための平均勉強時間

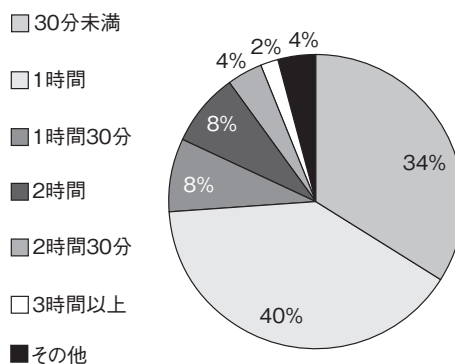


図3 解剖学小テスト一回のための平均勉強時間

て、低学年時における基礎科目を理解不足のまま進級し、専門科目について行けず、その結果、勉強意欲を失っているとの指摘も少なくなかったとある²⁾。これは本学歯学部の学生にも当てはまる内容であるとする。また、千歳科学技術大学の

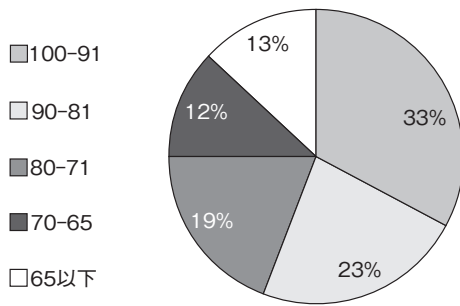


図4 口腔解剖学の前期定期試験の成績

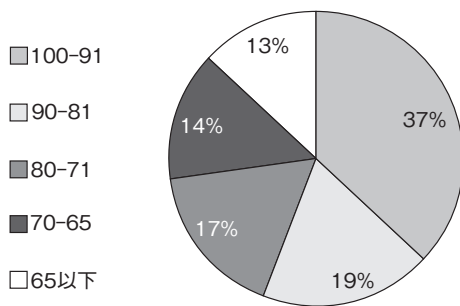


図5 解剖学の前期定期試験の成績

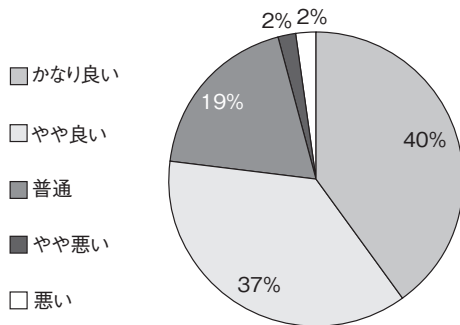


図6 小テストのシステムについて

大学教員を対象とする調査によれば、6割を超える教員が、「学生の学力低下」を問題視し、特に論理的思考力や表現力、主体性などの能力が低下していると指摘しており、成績不振者への早期の対応が必要であるとしている³⁾。また、大学1年生を対象とした調査結果によれば、大学の授業

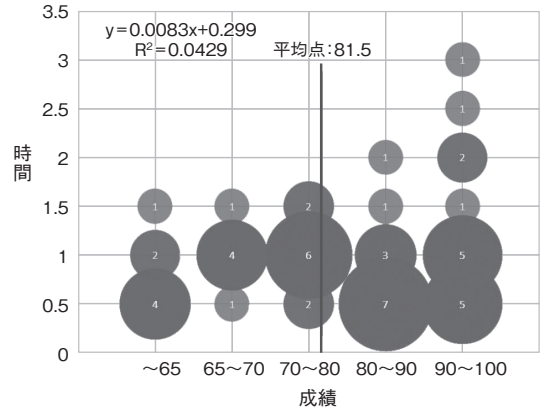


図7 口腔解剖学の学習時間と成績分布

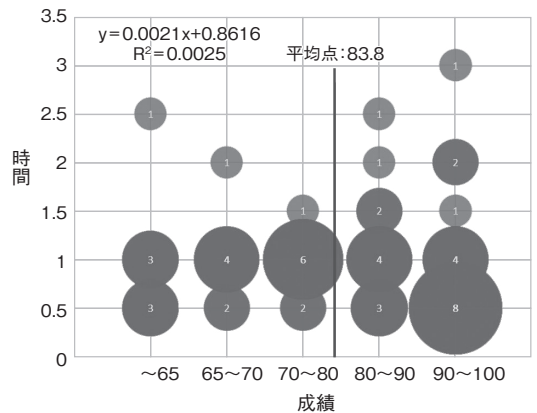


図8 解剖学の学習時間と成績分布

に「ついていけない」、大学で「やりたいことが見つからない」等の回答が相当の割合を占めているとある⁴⁾。このような状況には成績不振者の層を早期に発見し、学習面やモチベーションに対する対応が必要と考えられる。石原らによると成績不振の学生たちは正しい学び方をこれまでの学校生活で身に付けてこなかったことが障壁となり、積極的な学習ができないままにしていることが考えられ、低学年時に学習習慣や学習姿勢を身に付けることは重要であるとしている⁵⁾。

井上らの調査によると推薦入試を含めた入学方式別に6年時の得点率と比較したところ有意差は無かったとある⁶⁾。また、成田は卒業時の成績と高校偏差値の間には低い正の相関がみられる程度であり、卒業時の成績と入学前の実力テストの間

表1 主な自由記載欄への記載

-
- ・再テスト自体要らないと思う。
 - ・再テストは8割取るまで帰れない方式でも良いと思う。
 - ・毎時間きちんと復習することでまとめテストや定期試験での勉強時間が少なくて助かります。
 - ・勉強するポイントをしっかり抑えていて、とても良いと思う。
 - ・毎時間のテストを作成する先生方の苦勞がありがたいです。
 - ・復習の習慣ができた気がします。
 - ・朝の小テストがとてもありがたかったです。
 - ・本学の雰囲気や鑑みると小テストが無ければ誰も勉強しないのでテストは適切だと思う。
 - ・毎週3コマ分はきつとも思った。
 - ・小テストがあるので、理解不足の点がわかりやすく、複数回同じ範囲を勉強するので知識が定着しやすく大変助かった。
 - ・小テストのおかげで、毎回どの辺りが重要なかを知ることが出来てとても良かったと思う。
 - ・教えてもらう事柄もとても簡潔にコンパクトにまとまっていて、とても分かりやすかった。
-

には有意差や相関がみられなかったと報告している⁷⁾。このことから在学中に身に着けた学習習慣やそれぞれのモチベーションが卒業時の成績に関与するものと考えられる。

以上のことから専門科目が始まる第2学年において日常の小テストの実施は早期に成績不振者を把握するためにも、学習習慣を身に着けるきっかけとしても有効であり、その後の学習方針を検討するためにも重要であると考えられた。

結 論

小テストにより日常的に評価が行われることで専門科目が始まる第2学年の一部において、学習習慣の改善が行われていると考えられた。小テ

ストの実施は早期に成績不振者を把握するためにも、学習習慣を身に着けるきっかけとしても有効であり、その後の学習方針を検討するためにも重要であると考えられた。

本論文に関して開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 全国医学部長病院長会議定例会記者会見資料医学生の学力に関するアンケート調査結果 (2017年3月16日) https://www.ajmc.jp/pdf/170316_1.pdf (閲覧日2019年2月6日)。
- 2) 黒田孝春, 宮川正平: 成績不振者の調査報告とその考察. 木更津工業高等専門学校紀要 **28**; 7-11 1995.
- 3) 大河内佳浩・山中明生: プレースメントテストや高校の履修状況などのデータを用いた初年時成績不振者の早期発見. 日本教育工学会論文誌 **40**; 45-55 2016.
- 4) 中央教育審議会大学分科会: 学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ) http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958_001.pdf (閲覧日2019年2月6日)。
- 5) 石原好宏, 小田誠雄, 阿部和子・他: 大学全入時代の学生たちに対する福岡工業大学短期大学の対処法とその検証. 工業教育 **57**; 50-55 2009.
- 6) 井上能博, 池野聡一, 宇都宮 郁: 本学における成績不振の理由に関するアンケート調査. 昭和薬科大学紀要 **51**; 1-7 2017.
- 7) 成田亜希: 高等教育機関における成績不振者の発見と対応の検討. 理学療法科学 **33**; 33-37 2018.

著者への連絡先: 佐藤知哉, (〒963-8611) 郡山市富田町字三角堂31-1 奥羽大学歯学部生体構造学講座口腔解剖学分野

Reprint requests : Tomoya SATO, Division of Oral Anatomy, Department of Morphological Biology, Ohu University School of Dentistry
31-1 Misumido, Tomita, Koriyama, 963-8611, Japan